



拓殖大学イスラーム研究所／京都大学イスラーム地域研究センター共催 『イスラーム・セミナー』開催

イスラーム研究所は、2007年7月20日(金)、21日(土)の二日間にわたり、拓殖大学文京キャンパスに於いて、京都大学イスラーム地域研究センターとの共催による公開研究会「イスラーム経済・金融研究レポート」(参加者80名)、ならびに「イスラーム銀行・金融の仕組みとその展望～啓典クルアーンの教義に立脚したイスラーム銀行・金融の手法を解明する～」(参加者180名)と題するイスラーム・セミナーを開催した。

7月20日公開研究会 「イスラーム経済・金融研究レポート」

I. 「イギリスにおけるイスラーム金融」 講師：セイフッディーン・ターグッディーン 英国マークフィールド高等学院教授

報告の主な内容は以下の通りである。

- ①大口取引におけるイスラーム金融の開始 (1980年)
 - ・ 湾岸諸国のイスラーム銀行：イスラーム法(シャリーア)に適合的な形で流動性を管理する必要性を認識。
 - ・ アラブ諸国系のロンドン・シティの金融機関は、代替となる金融商品を作り出した。
 - －ロンドン金属取引所(LME)での短期取引を利用したムラーバハ(利益分配契約)・ベースの金融商品
- ②アル=バラカ・コーポレーションの経歴
 - ・ 1982年:アル=バラカ・コーポレーションが貯蓄銀行であるHargrave Securitiesをイスラーム銀行に転換させた。
 - ・ 提供サービス: 当座預金口座 + 投資預金口座
 - ・ 当初: 主に、ロンドンを訪れたアラブ人の富裕層を対象とした。
 - ・ 資産サイド: 現金+他の銀行への預金+提携会社を通じた商品取引
 - ・ その後の発展: 1989年にロンドンに2店舗開設。
 - － 1991年時点での顧客は約11,500人。
- ③アル=バラカ・コーポレーションの撤退
 - ・ イングランド銀行は、1991年のBCCI (Bank of Credit and Commerce International) の破綻以後、規制基準を強化。
 - ・ アル=バラカ・コーポレーションは、新たな資本を注入し、イギリスの預金保険制度に従う必要がでてきた。新しい規制基準への対応は、コスト高だけでなく、イスラーム法に適合しない部分があった。そのため1993年、銀行のライセンスを手放す。
- ④United Bank of Kuwait (UBK)
 - ・ 1991年: ロンドンに本拠を置くUnited Bank of Kuwaitがイスラーム金融部門を設置。
 - ・ そこでの業務は、イスラーム法にもとづいたもので、それ以外の業務とはバランスシートが切り離されていた。
 - ・ 資産運用はイジャラ(リース契約)+商品取引による。
 - ・ 1990年代末期の資産総額: 7億5000万ドル



会場風景

- ・ Ahli Bankと合併し、Al-Ahli United Bankへ。
- ⑤The Islamic Bank of Britain (IBB)
 - ・ IBB: 湾岸諸国の企業人たちが設立資本金(5000万ポンド)を引き受けたことで設立。
 - ・ 2002年: 設立申し込みがFSA (The Financial Services Authority) によって受け入れられる。
 - ・ 2004年: 第1号支店(エッジウェア・ロード)を開設。
 - ・ イスラーム的な価値とともに、イギリスの金融スタンダードを受け入れることをめざす。
 - ・ 提供サービス: 当座預金、ムダーラバ・ベースの貯蓄預金、定期預金、資金管理口座・・・
 - ・ 貯蓄預金: 1ポンドから
 - ・ 定期預金: 5000ポンドから (1・3・6ヶ月もの)
 - ・ 小口資金管理口座: 10万ポンドから (1・3・6ヶ月もの)

- ・ 個人向け融資: 1000~20000ポンド (12・36ヶ月)
- ・ 自動車ローンは2005年開始、住宅ローンは検討段階

課題と今後の展望: 2005年に財務相が持ち家促進制度の下で、イスラーム住宅ローンを利用することを容認したこともあり今後の発展に期待が持てると同時に、イスラーム金融はシティを相手にするだけでなく、もっと地域のムスリム・コミュニティに浸透を図る必要があり、さらにイギリスの規制ルールとイスラーム金融の適合性をめぐって検討を重ねる必要性あり。

II. 「マレーシアにおけるイスラーム金融」

講師: アブドゥッラヒーム・アブドゥッラ

フマーン マレーシア・イスラーム国際大学准教授(同大イスラーム銀行・金融研究所所長) 報告は以下の通りである。

- ①マレーシアにおける二元的銀行システム
 - 1963年: 巡礼資金運用基金がイスラーム金融の方法を採用。
 - 1983年: イスラーム銀行法成立、イスラーム金融を「イスラームの教義に反するあらゆる要素を含まない業務をめぐず金融活動」と定義。
 - 1993年: 金融機関によるイスラーム金融業務の取り扱いを容認。
 - 1994年: マレーシア中央銀行が、国家イスラーム法諮問委員会設置。
 - 2003年: 金融機関の子会社によるイスラーム金融業務の取り扱いを容認。
 - 2005年: 外資系イスラーム金融機関によるマレーシア国内でのイスラーム金融機関設立ライセンスの取得が可能になる。
- ②マレーシア中央銀行-イスラーム金融のための金融マスタープラン (2001年3月)
 - ・ 2010年までにイスラーム金融の市場規模を20%に設定。
 - － 在来型金融機関によるイスラーム金融を取り扱う子会社の登場。
 - － 外資系イスラーム金融機関の設立許可。
 - ・ 頑健で資本力のあるイスラーム金融機関の育成。

- 在来型金融機関と比べてイスラーム金融機関は小規模過ぎる？
- 近い将来、イスラーム金融機関のM&A (Mergers and Acquisitions、(合併と取得)の略)は起こりうるか？
- ・ 包括的な金融商品群の整備
 - マレーシア中央銀行のシャリーア諮問委員会は、新しい金融商品を認可
 - 金融商品のイスラーム法との適合性に対して、ムスリムは敏感
- ・ 包括的なイスラーム法による規制監督の枠組み作り
 - コーポレート・ガバナンス、リスク・マネジメント、イスラーム法による監督などに関する詳細な基準作り
 - マレーシア中央銀行のシャリーア諮問委員会
- ・ イスラーム金融に関わる司法制度の整備
- ・ 人材の育成
- ③ イスラーム金融センターに向けてのマレーシアの挑戦
 - ・ 継続的なイスラーム金融のエキスパートの養成
 - ・ 他のイスラーム金融センターに対する優位の確保
 - イスラーム金融の未浸透地域への注目
 - 効率的で効果的なインフラの整備

課題と今後の展望：今後のイスラーム金融の変容にも対処しうる健全で安定的なイスラーム金融システムの構築に向けた規制監督の枠組みの構築と、イスラーム金融のダイナミズム・革新性・持続的な発展の保証のために、コンスタントな金融商品の開発、イスラーム法の尊重、研究のさらなる促進。

Ⅲ. 「イスラーム金融の成長と発展」 講師：ジョン・パトリック・ウィリアム・フォスター ドバイ・イスラミック・ビジネス&ファイナンス副編集長

- 報告は以下の通りである。
- ① イスラーム金融の歴史的概観
 - 1950年代：イスラーム世界の独立の中での理論的な枠組みの提供
 - 1960年代：エジプトとマレーシアの実験的試み
 - 1970年代：イスラーム開発銀行
 - 1980年代：金融商品の多様化、経済制度のイスラーム化
 - 1990年代：世界有数の金融機関の参画
 - 2000年代：市場の急拡大、制度的インフラの整備
 - ② イスラーム金融は国際金融の中で主流になりつつある。
 - ・ OIC (イスラム諸国会議機構) 諸国に対して：
 - 金融への需要に対応する。
 - 社会のステイクホルダーを広げる。
 - 銀行を利用できる人口を増加させる。
 - 社会的紐帯の強化の結果として、経済的な効率性を実現する。
 - 金融システムの安定性を高める。
 - 資産の裏付けのある取引の推進。
 - ・ 非OIC諸国に対して：
 - より広い市場への接近—ムスリムが少数派の地域への接近。
 - 代替的な資金提供先—新たな投資家の獲得。
 - OIC市場へのゲートウェイ。
 - ③ イスラーム金融のさらなる飛躍の可能性。
 - ・ 8~10年以内に、全世界のムスリムの貯金の半分 (16億米ドル) は、イスラーム金融に流れるという観測。
 - ・ イスラーム保険 (タカフル) 市場は、2011年には、144億米ドルに達する見込み。
 - ・ 流動性が高い、新たな金融商品の開発による多様化。
 - プロジェクト・ファイナンスは今後5年間で5000億米ドル。
 - 資本市場の発展：マレーシア—債券発行の71%がスクーク(イスラーム債券)。
 - ・ イスラーム金融はムスリムが少ない国においても注目を集める。
 - ドイツ・・・初のユーロ建てイスラーム債の発行 (2004年)
 - イギリス・・・国内初の独立したリテール・イスラーム銀行 (04年)
 - 日本・・・国際協力銀行が初めてスクークを発行する予想
 - ・ 収束と転換
 - エシカル・インベストメント、コミュニティ・バンキング
 - イスラーム金融機関への在来型金融機関からの転換
 - ④ 結論
 - ・ イスラーム金融の今日的状況：急速な拡大
 - 効果的なフレームワークの欠如
 - コスト、イスラーム法の信頼性、競争上の不利
 - ・ 効果的なフレームワークの構築のためには・・・

- イスラーム金融の実務家と規制当局の間の協力、イスラーム金融機関どうしの協力
- 狭い金融の原則を追究すべき

課題と今後の展望：イスラーム金融の特徴についての認識を見失わないこと。それはグローバル化におけるイスラーム金融の規制監督、イスラーム法の信頼性の様々な諸要素のバランスなどである。

以上の三名の発表後に出席者から専門的な質問が飛び交い、現地でのイスラーム金融の実態がさらに詳細に明らかにされた。参加者は約70名であった。

7月21日イスラーム・セミナー 「イスラーム銀行・金融の仕組みとその展望～啓典クルアーンの教義に立脚したイスラーム銀行・金融の手法を解明する～」

I. 「イスラーム金融と日本」 講師：武藤英臣 イスラーム研究所客員教授・シャリーア専門委員会委員長

- 主な内容は以下の通りである。
- ① イスラーム金融の潮流
 - ・ オイル・マネーの影響、イスラーム意識の覚醒
 - ② イスラーム経済の理念
 - ・ シャリーア (イスラーム法) の下での経済活動
 - ・ 福利実現のためのイスラーム経済理念
 - ザカート (喜捨)：富の分配=財物の真の所有者 (神)
 - 利子の禁止：利益の公平さ
 - 退蔵、独占禁止：経済の活性化
 - ③ 日本におけるイスラーム金融の可能性
 - ・ 日本の金融機関によるイスラーム金融理解の必要性
 - ・ 有利子金融機関と無利子金融機関の共同作業の検証
 - ・ シャリーア・ボード設置：信頼性の構築

II. 「シャリーアの規則とイスラーム銀行の歴史的発展」 講師：サルマ・サイラリー モーリシャス財務省経済分析官・京都大学客員准教授

- 主な内容は以下の通りである。
- ① イスラーム金融：イスラームの教義に基づく倫理的な金融システム
 - ② イスラーム金融の倫理的側面とそれが提供する諸価値 (効率性、競争力、収益性) が、ムスリムや非ムスリムを惹き付けている
 - ③ なぜ、宗教 (イスラーム) と金融が結合するのか？
 - ・ 人間の生き方を規定しているのは神 (アッラー) である
 - ・ イスラームとは「神の意志への服従」を意味する
 - ・ そこには、金融活動をシャリーアの命令に適合的なものにすることも含まれる
 - ④ 倫理や宗教的価値を重視した金融は新しいものではない
 - 社会的責任投資 (SRI) との比較。SRIはコーポレート・ガバナンス、投資先や投資方法における社会的・倫理的な価値を重視
 - ⑤ 最初のSRIの発展：1920年代
 - ・ 北米のメソジスト派が神に背く産業 (ギャンブル・アルコール) に対する株式投資を敬遠
 - ・ この運動は、クウェーカーと関係のあるキリスト教徒に端を発する
 - ・ しかし、今日のSRIは宗教的な運動も促さないし、宗教的な動機からも発生してこない
 - ・ むしろ、ヒューマニズム、環境保護主義、世俗主義にもとづくSRIが主流
 - ⑥ SRIでは、倫理的に望ましくない経済活動がふるいにかけるられる例：アルコール、たばこ、麻薬、公害、ポルノグラフィ、兵器
 - 同時に、SRIでは、望ましい経済活動に積極的に投資される例：環境保護、人権、動物保護、累積債務削減、科学技術振興
 - ⑦ イスラーム金融：SRIの掲げる基本的な価値を共有
 - ・ 倫理的な経済活動、環境保護への関心
 - ・ 社会的な一体性と社会正義
 - ・ 人間の福祉
 - ・ 公正な金融活動の促進
 - ・ 持続可能な経済発展
 - ・ 消費者責任
 - ・ 企業活動の社会的責任
 - ⑧ イスラーム金融の独自性：
 - ・ 利子 (リバー) を含む取引を排除

- 利子をとる在来型の金融を忌避するムスリムたちの金融への需要を満たすために発展してきた
- ・リバー無きイスラーム金融システムの構築
- ⑨ 利子の排除は、イスラーム金融の特徴の一部だが、シャリーア（イスラーム法）は禁止事項だけを述べているわけではない
- ・イスラーム金融は、より望ましい金融のあり方を常に模索している
 - ・一般的ルール：“アッラー（神）が明らかに禁じ給うていなければ、あらゆることは許される”
- ⑩イスラーム金融の現代的意義
- ・近代的な金融とイスラーム法の統合
 - ・ムスリムの金融に対する需要と信仰心の両立
 - ・地域経済の発展を促すコミュニティ・バンキングの役割
 - ・在来型金融に代替しうる倫理的な金融システム
 - ・貨幣経済と実物経済のリンク
 - ・実物資産の裏付けのある取引や企業家精神の奨励
- ⑪結語
- ・イスラーム金融は、代替的な金融システムとしての役割を十分に果たしうる
 - ・すでに多くの金融機関や政府によるサポートを獲得（例：イスラーム債券・スクークの発行）
 - ・イスラーム金融の倫理的な側面は、イスラーム金融の成長に大いに寄与する

Ⅲ. 「イスラーム金融業の成長と現在の進展」講師：メフメット・アスタ

タイ 英国・ダーラム大学教授
主な内容は以下の通りである。

- ①イスラーム金融の現状
- ・世界的な市場規模：6500億～7500億米ドル
 - ・年率15～20%で成長
 - ・300以上のイスラーム金融機関
 - ・イスラーム金融の牽引役
 - －サウディアラビア、アラブ首長国連邦、バハレーン、クウェート
 - ・在来型金融機関からイスラーム金融機関へ転換した例
 - －National Bank of Sharjah, Bank Al Jazeera,
 - －Kuwait Real Estate Bank, UAE's Dana Gas
- ②イスラーム資本市場：スクークがイスラーム金融を活性化し、その中心的存在になりつつある
- ・イスラーム債券資本市場の飛躍的発展
 - －パイオニア：Shell Malaysia（1990年）
 - －政府による発行：Dubai, Qatar, Bahrain, Pakistan
 - －企業による発行：
 - 2001年：Kumpulan Guthrie Berhad（マレーシア資本のプランテーション会社）→初のグローバル・スクーク
 - 2004：ドイツのザクセン・アンハルト州→欧米初の公機関発行スクーク
 - 2006：East Cameron Partners（石油ガス会社）→アメリカ初の企業発行スクーク
 - ・非イスラーム国や世界単位でのイスラーム金融の取り組みの活発化：
 - イギリス・・・イスラーム金融に協調的な規制枠組みの提供
 - 日本・・・5億米ドルのスクーク発行を検討（2007年）
 - 国際金融公社（IFC）と世界銀行
 - ・マレーシア市場で総額3億3000万米ドルのスクークを共同で発行
- ③イスラーム金融市場：成長にはイスラーム金融のさらなる巨大化が不可欠
- ・スクーク市場・・・700億米ドル
 - －GCC内で発行される債券の80%がスクーク
 - －マレーシア・・・スクーク発行では世界一
- ④イスラーム資本市場の拡大：スクーク
- 世界的拡大：イスラーム金融は、GCC（湾岸協力会議）や東南ア



質問に答える講師陣

- ・アジアの域を超えて拡大している
- ドイツ：2004年8月：ザクセン・アンハルト州が1億ユーロのスクークを発行
- カザフスタン：2005年3月：5000万米ドルのコモディティ・ムラーバハ（Bank TuranAlem）
- トルコ：2005年10月、12月：5000米ドルのコモディティ・ムラーバハ（TSKB）、4400米ドルのムラーバハ（FFK Fon Leasing）
- アメリカ：2006年6月：1億6500万米ドルのスクーク（East Cameron Partners, Texas）
- 日本：2006年8月：3億～5億米ドルのスクーク検討（国際協力銀行、JBIC）
- 中国：2006年9月：電力開発のために2億5000万米ドルのスクークの発行
- イギリス：2007年4月：スクーク発行に関する政府による検討会
- イギリス：2007年5月：2億2500万ポンドのイスラーム・レバレッジド・バイアウト（アストン・マーティンをフォードからインベストメント・ダールを筆頭とするコンソーシアムが買収）

⑤イスラーム金融の主要な課題

- ・発展規模と「規模の経済」の重要性
 - －資本市場の成長におけるセカンダリー・マーケットの出現
 - －金融商品の多様化と精緻化
 - －スケール・メリットの享受のための合併・統合の必要性
 - ・継続的なイスラーム金融の担い手の育成が不可欠
 - －標準化された業務水準の必要性
 - －イスラームの理念から登場した金融・・・絶えざる再検討の必要性
 - －研究開発投資
 - －教育センターの充実
 - －シンクタンクの設立
- ⑥イスラーム金融：その大きな将来性
- －8～10年以内に、全世界のムスリムの貯金の半分（16億米ドル）は、イスラーム金融に流れるだろう
 - ・イスラーム金融の牽引役としてのイスラーム保険市場：
 - －2011年には、144億米ドルに達する見込み
 - ・国際資本市場におけるイスラーム金融の

大きな役割：

- ・イスラーム金融機関・・・高い流動性、新たな金融商品の開発によるさらなる多様化
- －プロジェクト・ファイナンス・・・今後5年間で5000億米ドル
- ・イスラーム資本市場の発展：スクークは7000億米ドル以上
- ・イスラーム金融はムスリムが少ない国においても注目を集める：
 - －ドイツ・・・初のユーロ建てイスラーム債の発行（2004年）
 - －イギリス・・・国内初の独立したリテール・イスラーム銀行（2004年）および投資銀行（2006年）
 - －DBS Bank（シンガポール）は、アジア・イスラーム銀行（IB Asia）の設立に乗り出す（2007年5月）
- ・OIC市場へのゲートウェイとしてのイスラーム金融：
 - －ジョイント・ベンチャー、市場参入機会
 - －官民連携
- ・合併・統合・提携による巨大化・集約化と在来型金融のイスラーム金融への転換：

3名の講演後、前日行なわれた研究会「イスラーム経済・金融研究レポート」の講師3名も発表者と共に壇上に並び、聴講者からの質問に答えた。

2時間半という短い時間ではあったが、180人を超える聴講者はそれぞれの発表に熱心に耳を傾け、専門的な質問の投げかけによる討論などもあり、セミナーは大盛況のうちに幕を閉じた。

ウズベキスタン旅行記（1）

金沢工業大学講師 村中博文
(拓殖大学大学院国際協力学研究科第一期生)

はじめに

拓殖大学大学院にて森岡研究所長の下でイスラーム地域研究を学び、昨年卒業された村中氏からこの夏中央アジアのウズベキスタンへ旅行された時のイスラーム世界体験記が寄せられましたので、2回に分けて連載します。

第1日目（8月10日（金）：東京～タシケント）

午前10時15分、ウズベキスタン航空528便にて成田から出発し、途中、関空を経由してウズベキスタン共和国のタシケント国際空港に向かった。

飛行機が韓国上空、中国上空と、西に進むにつれ、上から見下ろす地上の景観が、緑からやがて黄色、次いで茶色、パミール高原では赤茶色と、まさに地図の色そのものになっていくことで、徐々に中央アジアに近づいてきたことが機内からもはっきり確認できた。

いよいよタシケントが近くなり、機内で入国カードを渡されたが、これを適当に書いたことが後に帰国する際にちょっとしたトラブルのもとになるとは、この時は考えもしなかった。

ともあれ飛行機は、予定どおり8時間後の現地時間（日本の-4h）午後5時、タシケント国際空港に着陸した。エプロン（駐機場）には迷彩服姿の軍人の姿が目についたが、ものものしい雰囲気はなく、一見のんびりとした地方空港のように見え、滑走路わきにはわが国では見ることもない複葉機がずらり横一線に並んでいたのが珍しかった。おそらく軍の訓練用として、現在も使用されているものだろう。

それにしても雲もなく、貫けるように真っ青で澄みきった空の色はどう表現したらいいのか。まさに聞いていたとおりの「空」の色であり、爽やかな風とともにこの空は滞在期間中、ずっと私の心をなごませてくれた。

とはいえ外はかなり日差しが強かったため、ここから日除け用のバンドナとサングラスの世話になることになった。飛行機を降りて薄汚れたバスでターミナルまで移動、そこで入国手続きを済ませたが、ここでは自分の手荷物が、なぜかモスクワからと表示された手荷物用コンテナに混在していたため、受け取りにすっかり手間取ってしまった。

ようやくのことで外に出ると、私の氏名を書いた紙を持った青年を見つけた。

この青年が帰国までガイドをしてくれるキム・アントン君である。タシケント東洋学大学で日本語を専攻し、最近まで福島県で1年間日本語を研修していたという23歳の物腰、態度などたいへん好感的な青年であった。聞けば朝鮮族の出身で、生まれてすぐにノボシビルスクからタシケントに移住し、母親も日本語教師をしているとのこと、ひらがな、カタカナ、漢字も全く苦にせず、流暢な日本語を話すのには感心した。

彼とは滞在中、ほとんど日本語で話すことになったが、私としては、かつて学んだロシア語を多少思い出したいとの気持ちもあったことから、なるべくロシア語で会話することに心がけた。

ここタシケントは、チュルク語で「石の町」という意味で人口210万人、ウズベキスタンの首都というだけでなく中央アジア最大の都市で



イチャン・カラ要塞で

あり、唯一地下鉄が走る町である。緑が多いとは聞いていたが、なるほど車から眺めているだけでも、よく整備された町並みの中にあざやかな緑をそこかしこに見ることができた。

空港から促されるままタクシーに乗り、午後6時には宿泊先のタシケント・パレスホテルに着いた。

このホテルはタシケントのほぼ中心部にあり、第二次大戦後、ソ連に抑留された日本軍人によって建てられ、1964年にこの地を襲った大地震にも耐えたことで有名なポリショイ・ナヴォイ・オペラ劇場の真正面にある外国人観光客用のホテルである。



ヒヴァ城内

ガイドのアントン君がホテルからタシケント市内の自宅に帰ったため、私は部屋でしばらく休憩の後、午後7時から8時まで1時間ほどかけてゆっくりと夕食をとり、午後10時30分、明日からのウズベキスタン縦断に備えてベッドに入った。

第2日目（8月11日（土）：タシケント～ウルゲンチ～ヒヴァ～ウルゲンチ）

午前6時に起き、ホテル前のポリショイ・ナヴォイ・オペラ劇場の周辺を散歩した。この劇場は、ここへ来る直前に見たNHKテレビで紹介していたとおり、豪奢かつ堅牢に造られており、地震当時、これを造った日本人の勤勉さと優秀さを示すものとして現地の人々が驚嘆したのもうなずけた。

午前7時、ホテルに戻って朝食をとり、8時半に迎えに来たアントン君とともにタシケント国際空港に向かった。搭乗手続きを済ませ、10時30分同空港発、午後12時に次の観光地ヒヴァの基点となるウルゲンチに到着し、空港から迎えにきていたタクシーで直接ヒヴァに向かった。

当初、このタクシーはヒヴァまで行くための一時的に利用する現地の近距離タクシーだと思っていたが、これから以後、帰国の日まで行動をともにするとのこと、ウズベク人のタクシー運転手はサマルカンドから来ていて、年齢は30歳、二人の子供の父親で宗教はイスラームでスンナ派ということであった。ちなみにガイドのアントン君とはといえば、かれは敬虔なロシア正教徒であり、彼らのくっつくなく交わす会話などからは宗教にからんだ不協和などはまったく感じられず、うまく調和していることがうかがえた。私が片言のアラビア語で挨拶したり、クルアーンの一節を言ったりすると二人とも大喜びしたものである。

ついでに言うと、彼が運転するタクシーは韓国の大宇製の小型セダンで、ウズベキスタンを走っている乗用車としてはもっともポピュラーなものであった。日本車は首都タシケントでもわずかに見かける程度で、彼も含めてほとんどのドライバーは日本車、それもトヨタ・カムリを持つのが夢だということであった。

しかしウズベキスタンでは日本車にしても他の車にしても、外国からの自動車購入にはかなりの税金負担を強いられ、おいそれと買うことができないらしい。ちなみに燃料はガソリンではなくプロパンガスであり、他のほとんどの車もプロパンガスを燃料としているとのことであった。

ウルゲンチからヒヴァまで約35Kmであり、途中、道路をゆったりと走るトロリーバスと、それを道路わきの停留所で待つ現地の人々や、スイカやウリなどを並べてのんびりと客を待つ付近の農民のコントラストが、なんとも風情を感じさせるものであった。

1時間後の午後1時にヒヴァに到着、この町は、東に広がるキジルクム砂漠と南のカラクム砂漠のほぼ中間に位置したアムダリヤ下流のオア

シスの町である。「博物館都市」として1990年にユネスコ世界文化遺産に登録され、外壁と内壁からなる二重の城壁に囲まれ、未完成のまま建築が中断した青色のポールで有名な内城のイチャン・カラにそれぞれ20のモスクとメドレセなど数多くの遺跡が残っている。

のんびり歩いていると、前方からにぎやかな音楽と歌声が聞こえてきた。どうやら結婚式が行われているらしく、イスラーム的な服装で着飾った若いカップルとそれを祝福する一団が、それも何組も続いていた。

昼食は、アントン君がかたわらの家屋に入って何やら交渉したのちから手招きするので入ってみると、一見ごく普通のウズベクの民家としか思えないようなその家屋がレストランであり、そこでとった。今にも壊れそうなハシゴを上った2階に急ごしらえのテーブルが用意され、その上にパン、少々の肉、それに野菜の炒め物やトマト、キュウリなどを載せた皿を置いた程度の素朴な料理が並んでいた。

そういえば、成田から飛び立ってから機内食に始まり、ホテルでの食事、外での食事を問わず朝、昼、夕と、ほとんど同じようなメニューが続いていることに気づいた。要するに豪華であるとか粗末であるとかは1、2品多いか少ないか程度の違いであり、このパターンは最終日のウズベキスタン出国まで続いた。

午後5時近くまでヒヴァの街中を散策して、逆コースでウルゲンチに戻ったが、途中、道路沿いで果物を売る一家からウリを買い、その場で切ってもらい食べたところ、おどろくほど甘くてうまかった。

宿泊先のホレズム・パレスホテルに着いてからも食べてみたが、優に1個で10人前はあるような大きくて見事なウリは、全部はとも食べきれぬものではなかった。

この日は午後6時にホテル着。まだかなり陽が高く、明るかった。

ヒヴァ観光の基点であるウルゲンチは、特徴的な建物などは全くない普通の町とは聞いていたが、そのとおりホテルから見限りでも、同じような低層の住宅が立ち並んでいるばかりであった。その上、このホテルさえ町の中心にあるのか外れに所在するのかもわからないような有様で、しかもすぐ目の前で大掛かりな道路補修を行っており、外を出歩く気分にもならなかった。ホテルの中においてすら他の宿泊客を見かけることは全くなく、しばらく何とも閑散で退屈な時間を下着などを洗濯して過ごした後、午後7時から約2時間かけてのんびり食事をとり、10時半に就寝した。

第3日目（8月12日(日)：ウルゲンチ～ブハラ）

午前6時に起床、7時半から8時半に朝食をとり、9時にホテル発、次の観光地ブハラに向かう。

車は右側通行で、幹線道路では常時110～120キロのスピードで走るのであるが、当初はこの猛スピードに加え、追い越し時に片側二車線の左側からクラクションを鳴らしながら中央線からはみ出すことにヒヤヒヤさせられた。また、横断歩道などは全くなく、歩行者が横断するときは左右からの車の行き来を見極めながらするが、車のほうは横断する人のことに頓着する様子にはなかった。事故の際の保険のことを聞くと、ほとんどのドライバーは保険に入っておらず、というより保険システムそのものが理解されていないらしい。

ウルゲンチからブハラまで約500Km、車は一路、幹線道路を東に進み、やがて砂漠地帯に入った。この砂漠がキジルクム砂漠であり、途中、アムダリヤ河畔に車を止めて短い休憩をとった。アムダリヤは止まっているかのように静かであり、この辺りの川幅は広いところで300メートルくらいはあっただろうか、少し土気色によどんでいたもの



レストランのトイレ

の南東から北東方向に悠然と流れる様に少しばかり感動した。

ここから南に望む対岸から少し南側に入ったところが隣国トルクメニスタンであり、その眺望を遠目に見ながら出発した。砂漠を1時間ほど走ったところで午後12時過ぎ、砂漠のど

真ん中に1軒だけポツンと建っている小さなレストランに到着し、いつものメニューの昼食をとった。食事後、離れにあったトイレに行ったが、あまりの汚さに何となくその気がなくなり退散したものである。



民族舞踊の夕べ

トイレ事情について触れておくと、現代の日本人の衛生観念で考えるとかかなり不便で不潔である。したがって、特に地方では、観光よりも、まずトイレの場所を確認しておくことが大事であると痛感したものである。

ここを午後1時に出発してから約2時間、車はブハラに入り、宿泊先のニューブハラ・パレスホテルに着いたのは、午後3時を少し回った頃であった。

ブハラはサンスクリット語で「修道院」を意味し、1220年にモンゴル軍の来襲で壊滅したが、その後復興して20世紀初めまでブハラ・ハン国の首都であった。タキと呼ばれるドーム型のバザールが多く、土色一色の旧市街地は2000年にユネスコ世界文化遺産に認定されている。

ホテルで一時休息した後、3時半から約2時間ブハラの名所旧跡を見学した。

見学途中のハプニングとしては、刺繍などの土産物を買いたいと一人の少女が出している露店を覗いたところ、周囲で店を出している別の中年女性が「うちで買え」とばかりに割り込んできた。このことが発端で、私という客をめぐる売り子同士をつかみ合いの抗争が繰り広げられる破目となってしまい、おかげで少しバツが悪い思いをしたが、ほかのところでも似たようなことがあったことを考えれば、案外、日常茶飯事のゲームのようなものなのかもしれない。ともあれ、ここでは大岡裁きよろしく「三方一両損」で手を打って決着した。

ほかに驚いたことでは、いわゆるロマとかジプシーと呼ばれる放浪の民を間近に見たことである。城壁から寺院へと何げなく歩いていると後ろのほうからマネー、マネーとか細い声が聞こえたようなので振り向くと、中年なのかあるいは実際はもっと若いのか、小さい子供を連れた女性が汚れた手を差し出しておりその汚さと同じ歩速でつきまってくることに何ともいえない不気味さを感じ、早々にその場を離れた。

ここでは、近年になって土中から発掘され、中央アジア最古のイスラーム建築であるイスマイル・サーマー二廟やブハラで最も高い建築物であるカラーン・ミナレットとその周辺のミル・アラダ・メドレセやアルク城などの名所旧跡を見てまわった。

どの建造物も、その建築様式から壁面に彩られたアラビア文字や紋様など、イスラーム文化の強い影響を受けたことがそこかしこに感じられた。

午後6時半、いったんホテルに戻った後、7時から市内の観光レストランで、地元主催の民俗舞踊を見学しながら夕食をとった。ウズベキスタンなど中央アジアにおけるイスラームがさほど戒律的でなく、わりと緩やかであるのは長年続いたソ連の支配による影響があるとしても、元来、この地域独特のおおらかな民族性に負うところが大きいのではないかと思われた。ここに限らず飲食に関してもかなり寛容で、ビールなどを飲みながら現地人、外国人観光を問わず大いに盛り上がっていたものである。

この席では福岡からの観光ツアーの邦人4人と意気投合したが彼らとはこれ以降、帰国前日まで行く先々で行き会うことになった。

民族舞踊は8時40分に終わり、午後9時20分にホテルに戻って、11時過ぎに床についた。

拓殖大学イスラーム研究所設立記念講演 イスラーム世界におけるアズハルの役割

はじめに

今年の4月からイスラーム研究所として再出発した記念にイスラーム世界の学問の中心であるエジプトのアズハル大学からムハンマド・アブドルファディール・アル=カウスイー・アズハル大学副学長をお迎えして講演して頂くことが出来た。公演日は8月5日と言う暑い盛りにもかかわらず80人近くの方が会場まで足を運んで熱心に講師の話に耳を傾けた。以下は講演の要約である。

第一部：アズハルの歴史

(1) アズハル・モスクはカイロに創立以来、今日に至るまで、二つの重要な役割を担ってきた。一つは礼拝を捧げるマスコドとしての役割であり、もう一つは大学としてイスラーム諸学が教えられ教育機関としての役割を持つ。

ヒジュラ歴365(西暦975)年、アズハル最初の教師が着任した。当時はシーア派がエジプトを支配していたのでそこでは、シーア派の法学が教授された。その学習方法は学生たちがシャイフやウスターズと呼ばれる教師を中心に車座になって座り、シャイフは高い椅子に腰掛けて本を読んだり、学生の一人に本を読ませたりし、次いでウスターズが解説をし、それから学生たちに自由討論をさせていた。それは気楽で開放的な雰囲気の中で行なわれていた。学生達は「ルワーク」(複数形：アルウィカ)と呼ばれる学生寮に泊まり勉学に専念した。アズハルの管理者たちは、イスラーム世界各地の地名を冠するルワークを管理し、各地の王や豪族、エジプトの金持ちは彼らの財産の一部をワカフ(永代寄進財)とし、そこから生じる収入によって、海外からやって来る学生たちの必要経費を賄っていた。

(2) その後ファーティマ朝が滅び、エジプトがシーア派からスンニー派の手に移ると、アズハルはごく一時期その重要性を失うことがあった。しかし、そのような状況にもかかわらず、アズハルで学んだ多くの学者を輩出している。例えば、神学と論理学、修辞学、医学を学んだアブドルラティーフ・ル=バグダーディー(ヒジュラ歴589年没)や偉大なエジプトの神秘主義詩人であるイブヌ・ル=ファーリド(同632年没)などがいる。

しばらくして、アズハルに輝かしい役割を担う時が戻ってきた。今までの役割に加えて、「宗教的権威機関」としての役割も担うようになった。歴史家によれば、宗教的権威者として最初のアズハルのシャイフは、11世紀末のマーリキー派のシャイフ・アル=フラシーであるとしている。その時以来、アズハルには一人のシャイフがシャイフ・ル=アズハルとか、シャイフ・ル=イスラームとか、シャイフ・ル=ムスリミーンと呼ばれるようになった。

アズハルの歴史について最後に指摘しておきたいのは、アズハルの学者たちは、エジプトにおいては、国民の指導者であり、選ばれた文化人だということだ。

第二部：アズハルのカリキュラムと特性

アズハルのこのカリキュラムには、以下に述べる数々の特性が認められる。

まず、一つの問題について様々な側面からのいろいろな意見を採り入れて検討すること。いろいろなテーマを論じ、個人的な見解同士、またはある論拠と他の論拠を照会し、比較検討する。

第二に、様々な見解を比較検討し、それらを統合して妥当な見解を出す。このカリキュラムはアズハルの伝統において、「異論間の衝突

回避」と呼ばれている。例えばイスラーム法比較解釈学やイスラーム法源学、教義学その他の分野で、アズハルの特性は諸派間を比較し、時にはそれら学派を離れて、アリストテレスの論理によって最善の道を決める。

第三に、相手を不信仰者と決めつけるタクフィールを厳しく避けてきたこと。何故ならばアズハルの学生は、その草創期から、「ムスリムをグループ化し、分裂させ、信条を弱体化させる最も危険な誘惑はタクフィールである」と認識しているからだ。もしこうしたアズハルの価値観がムスリムたちの間で支配的となって全世界に広まっていれば、現在私たちが直面しているような災難・テロ・暴力・破壊といったことを避けることができたと確信している。

第三部：イスラーム世界におけるアズハルの役割

アズハル創設以来、アズハルで学ぶ人々はアズハル周辺に設置されたルワーク(原義：テント、遮蔽物)に住み、勉学に励んだ。その宿舎に付けられた名前を見ればアズハルが世界中の学生を引寄せていたかがわかる。例えばモロッコ寮、シリア寮、トルコ寮、インド寮、ジャワ寮、中国寮など。



アズハル副学長

現代になってアズハルには、マディーナト・ル=バオース・ル=イスラミーヤ(イスラーム使節の街)と称する寮が設置され、そこに居住する学生総数は、3,700名に上る。国籍は104ヶ国だ。一方、アズハル大学には数多くの学部があり、そこで勉学する外国人学生総数(男女)は12,000名になる。

またイスラーム世界におけるアズハルの思想的役割については次のように言えよう。

①アズハルは、現代の虚偽・暴力に対する怠慢・忌避や開放・グローバルイゼーションに対する閉鎖分離主義のような二律背反の中にあって、イスラームの真の中庸性の具現化を目指している。

②アズハルは、イスラームの寛容性、多様性、広大性の具現化を目指している。

③アズハルは、イスラーム世界が危険な挑戦に直面していることを認識している。それに対しアズハルが理解するイスラームは、建設、繁栄、自由を教え、真、善、美を教え、社会と世界の平和を教え呼び掛けている。そのために過去の伝統・遺産と進歩する近代科学、過去と現在、人知と伝承のバランスと調和を図ることが必要であると考えている。

④アズハルは、人々の誰をも傷つけないよう、ムスリム自身が人類の一部であることを常に忘れないよう警告する。また他の人々の信じるものも尊重する。

⑤アズハルは、イラクやパレスチナやその他世界の各地で宗教や肌の色や男女の差別などで多くの人々が直面している不正や暴虐を速やかに排除するための作業に積極的に参画し、推し進めることを世界のムスリムたちに教え実行することを奨励している。また無知、貧困、病魔、圧制、悪行の問題に取り組む人道主義者に協力するよう、更に我々の住む美しい地球の汚染、環境破壊に反対する運動に協力するよう奨励している。

⑥アズハルは、世界のムスリム達に、物質主義や利己主義、人類の虚栄心が度を越した“精神と心”を元に戻すため精神的価値向上に努力している人達に協力するよう奨励している。“精神と心”は人間社会で物質主義の蔓延により衰退してしまっただが、アッラーが人間の心、知性、身体に与えてくれた内なる光だ。

ハディース入門 (8) – ハディースの伝達方法(つづき)

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

譲渡 (ムナーワラ)

ハディースの伝達方法の一つとしての譲渡には、次の2種類がある。

1. 認可 (イジャーザ) に等しいとみなされる譲渡：師がその弟子に彼が聞いたそのままの形、またはその一部分を示し、「これは私が伝聞いたものである (または、私が某から伝え聞いたものである)。それを伝達しなさい。」、または「私はあなたに、某が私から伝え聞いたものの伝達を認可する。」と言って、そのハディースの伝達権を譲渡するか、その者にそのハディースの廃棄または受け入れの判断を委ねることをいう。

2. 認可 (イジャーザ) とは異なる譲渡：師がその弟子に自筆のハディースを示して「これは私が伝聞いたものである。」との表明をしても、譲渡ではあっても認可とみなされない。

認可に等しいとみなされる譲渡については、その伝達の正当性が認められてはいるが、師弟間の伝聞や口上といった伝達方法の中で受け入れられるものとしては、最も下に位置づけられる。一方で認可とは異なる譲渡については無条件に却下される。

ハディースの譲渡を示す表現では、「(次のハディースは) 某が私に譲渡した。」または「某が私に譲渡した上で認可した。」というものが最も信憑性の高いものといわれる。またそれ以外の表現であっても、「某が我々に譲渡するとして語った。」とか「某が我々に譲渡の上、認可するとして伝言した。」というように伝聞や口上の事実を明示する表現は受け入れられる。

筆伝 (ムカータバ)

師が伝聞いたハディースを聞くためにやって来た者に対して、自ら筆記したりあるいは筆記するように指図したりして伝える方法を「筆伝 (ムカータバ)」といい、次の2種類が知られている。

1. 認可 (イジャーザ) に等しいとみなされる筆伝：「私があなたのために筆記した (または、あなたに対して筆記した) の伝達を、私はあなたに認可する。」というような表明を師がその弟子にしている場合は、認可に等しい筆伝とみなされる。

2. 認可 (イジャーザ) の表明が認められない筆伝：師が複数のハディースを弟子のために筆記したり弟子に書き送ったりしているが、その伝達を認可していない場合。

筆伝による伝承が受け入れられるか否かについても、学者たちの見解は分かれる。「認可に等しいとみなされる筆伝」については、「認可に等しいとみなされる譲渡」と同様に信憑性が高い伝達方法であるとの判断に異論は認められない。「認可の表明が認められないムカータバ」については、その信憑性について異論もあるが、師による伝達認可の意思表示が明確でなくても筆伝の実態が認可に極めて類似しているため、筆伝を受け入れる見解が主流を占めている。

さらに筆伝については、師の自筆であることの確認を受け入れるための条件とする者もいるが、全く同一の筆跡を有する別人物が存在し得ないという常識に照らして、師の自筆であることの客観的な物証は必要ないとする見解が支持されている。

告知 (イアラーム)

師がその弟子に、「このハディース (またはそれが収録された書簡の内容) について、私は聞いたことがある。」と発言することを「告知 (イアラーム)」という。これは師があるハディースについての知識を公表するもので、そこにハディースを伝達するという積極的な意図はない。イアラームについて学者たちの見解は大きく分かれる。伝統的に多くのハディース学者やイスラーム法解釈学者またはイスラーム法原論学者たちはイアラームを容認する傾向にあるが、中にはそれを容認しない者もいる。イアラームに否定的な者たちは、告知には師の個人的な見解が含まれている可能性があり、師により何らかの行為が加えられた可能性も拭いきれないし、師がそのハディースを偽作した可能性すら持たれると言う。師がそのハディースの伝達の信憑性を確信しているのであれば、単なるイアラームではなく、その弟子に対して少なくとも認可によってそのハディースを伝達していたとみなすのが妥当な見解といえる。イアラームでは、師に至るまでの伝承経路の信憑性が確認できない。

遺言 (ワスィーヤ)

師が臨終に際して、自身が伝達したハディースが収録されている書簡をある者に譲渡する旨を遺言することによって、伝達の実事と認定することを「遺言 (ワスィーヤ)」という。サハーバやタービウン等、最初期の信頼できるハディースの伝承者同士の間であればワスィーヤを正

当なハディース伝達と認定するという意見もあるが、書簡の譲渡を遺言するというだけでは、口伝による伝達が全く認められないことから、ワスィーヤには疑義が持たれるという見解が妥当とされている。

発見 (ウィジャーダ)

ある者がその師の手になるハディースの筆録を発見し、それを他の者に伝えることを「発見 (ウィジャーダ)」という。これは師から直接ハディースを伝聞いたことがなく、伝達の認可を得ていないものである。

「私は某の手による筆録を見つけた。」または「私は某が斯々云々と筆録したものを讀んだ。」「某の書の中に編著者自らの手になる筆記があったため、その者が我々に語ったとする。」「私はある者が他の者から伝聞いたハディースの筆録したものを讀んだ。」「それは私が筆記したものであると某が私に伝言した。」という表現に続いて伝承経路とハディース本文を伝えていることによって知られる。ウィジャーダによるハディースの伝達の実事は、その伝達に関わった者が筆録した人物を知っているという点によってのみ確認される。これらのハディースは発見者が誠実で何の作為も加えていないことが確認される場合にはムンカティウに分類されるが、中にはムツスィルと認められるものもある。しかし発見者の作為によってタドリースとなるハディースでは「私は発見した。」または「私は讀んだ」と表現しなければならないところを、「某が私に言った。」と表現することによって引き起こされる。

筆者と発見者の双方が信頼できる伝承者であると認められ、すべての伝承者も信頼できる人物であることが認定されない限り、ウィジャーダによる伝達は容認されない。

ハディースの筆録

ハディースの伝達方法に関連して、ハディースの筆録についての判断も理解しておかなければならない。ハディースの筆録については、容認するハディースと否認するハディースのそれぞれが伝えられている。これらの解釈に際しては、それらが語られた時の状況を理解しなければならない。

イスラーム以前のアラブでは詩や出来事などは記録されず、記憶されていた。マッカの商人は取引の記録や計算のため、読み書き算盤の知識が必要ではあったが、そうした能力を持つ者の数は多くなかった。イスラームで知識の探求と修得が推奨されるようになり、読み書きが普及するようになった。イブン・サードの『大列伝』は、バドルの戦いで捕虜となった者の中で読み書きができる者一人につき、預言者は10人のアンサールの子弟たちに読み書きの教授を認めたと伝えている。サハーバは預言者モスクに集まって読み書きを学んだ。

ハディースの筆録を禁じるハディースでは、アブーサイード・アルフドゥリーが伝え、ムスリムの『サヒーフ集』に収録されている次のものがよく知られている。

「私の話す言葉を書き記してはならない。クルアーン啓示以外に、私が記した言葉を書き記した者はそれを消去しなさい。私の話した言葉は、人々に伝えなさい。そのことはなんら構いません。」(日訳 サヒーフムスリム III: 809)

一方でハディースの筆録を認めるものとしては、アルブハーリーの『サヒーフ集』に次のようなものがある。

ウマル・ブン・アブド・ル・アズィーズはアブー・バクル・ブン・ハズムに書き送った。「汝のもとにある神の使徒の教えを集めて書きとめよ、なぜなら、わたしは知識の消失と学者達の消滅を恐れるから・・・」(牧野訳上: 53)

ハディース筆録についての預言者の真意を要約すると以下の通り。

1. ハディース筆録の否認はクルアーンの啓示が下っていた期間に限ってクルアーン以外のものと混乱するのを恐れての措置であり、それ以外の場合には認められていた。

2. 1枚の紙にクルアーンとそれ以外のものを書くことは禁じられていたが、それらを別々の紙片に筆録し混同しないように別個に保管しておく場合には認められていた。

3. 当初は禁じられていたが、クルアーンとの混同の恐れがなくなった後は容認に転じた。

4. 暗記することなく筆記に頼る恐れのある者には禁じられ、そうした恐れのない者には認められていた。

5. どうしても暗記ができない場合には暗記の補助手段として筆録することが認められていたが、完全に暗記できた後は筆録したものを破棄することが義務付けられていた。

6. クルアーンの編纂のような公用を目的とした場合には禁じられ、個人的に記録に留めておくような場合には認められていた。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: <http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/>

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成19年10月22日発行
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
柏原 良英

コラム

ムハンマドとイスラームの誕生(1)

1 イブラーヒーム (アブラハム) の宗教

世界的宗教と呼ばれる宗教のなかで、イスラームは最も遅く世界史の舞台上に登場した宗教である。イスラームはユダヤ教やキリスト教同様に、いまでいう中東地域の住人つまりセム系民族によっておこされた宗教である。セム系民族の間には古くから純正な一神教があった。

この純正な絶対的一神教が歴史のなかで理想的な形で現れたのが預言者イブラーヒームのときであり、クルアーンはこれを「イブラーヒームの宗教」と呼んでいる。クルアーンによれば、「イブラーヒームの宗教」とはユダヤ教でもなく、キリスト教でもなく、むしろユダヤ教やキリスト教もそこから出てきた本源となる宗教であり、アッラーが人類にその創造のときから授けた純正無垢な真の宗教である。このイブラーヒームの宗教の「絶対的一神教」を再現し完成したのがイスラームであり、純正無垢な真の宗教はその時以来イスラームとして固定され世界の終末まで続くことになる。

2 イスラームの最後の預言者ムハンマド

預言者とは字義通り神の言葉を預かるものである。イスラームでは、アッラーは人類の始まりからそれぞれの民族から預言者を選びだし啓示を下し、人々に最後の審判の来るのを常に警告してきたと考えている。その預言者の数は約12万4千人と伝えられている。そのうち、単に従来の警告だけで終わるのではなく、新たな立法を啓示により授かり人々を正道に導いた預言者を特に使徒と呼んでいる。その使徒の数は313人もしくは315人とされている。つまりすべての使徒は預言者であるが、すべての預言者が必ず使徒であるとは限らない。

イスラームの聖典クルアーンの中には預言者の名前が25人記されている。その預言者たちは同時に使徒でもある。そのうちの特に、ヌーフ (ノア)、イブラーヒーム (アブラハム)、ムーサー (モーセ)、イエス、ムハンマドの5人は志操堅固な使徒たちとして他の預言者とは区別して扱われ、またアダムは人類の父として特別視されている。

ムハンマドがイブラーヒームとも、他の預言者とも違う点は、彼がアッラーの純正無垢な真の宗教を支える長い預言者系列の最後であり、全預言者の封印であるということである。従来の預言者は各々の民族に送られていたがムハンマドは全人類に対して送られたとされ、彼の後には預言者と呼ばれるものは現れない。つまり神の啓示はムハンマドをもって完了したわけである。これ以後はムハンマドが受けた啓示を解釈していくことが人類にあたえられた使命とされる。

ムハンマドはアッラーから選ばれた預言者ではあるが、自分が神格化

されることを最も恐れ、自分が神や天使ではなく生身の普通の人間であることを生涯強調した。そのことは一般信徒が同じ人間としてのムハンマドの教えを体現することができることをも意味する。

(つづく)

研究会報告

【平成19年度第2回タフスィール研究会開催】

今年度第2回目のタフスィール (クルアーン解釈) 研究会が、7月28日2時より文京キャンパスF館で開かれた。今年度はクルアーンの第3章を6回に分けて読んでいた。今回はマラヤ大学博士課程の大木博文氏が31節から63節までを読み解説した。参加者はめったには聞けないアラビア語の解釈書を使ったイスラームの啓典の説明に興味深く耳を傾けていた。今回は特にクルアーンに語られているモーセからイエスにいたるユダヤの預言者たちの系図が明らかにされた。

来訪者

【サウジアラビアの文化・情報省次官来訪】

外務省の招聘で来日中のスベイエール文化・情報相次官が、8月22日当研究所を訪問し森所長をはじめ研究所スタッフと懇談した。氏は研究所の活動の重要性を評価し、今後の活躍を注目していくと語っていた。

محتويات العدد

1. محاضرة إسلامية – المصرية الإسلامية
برئاسة معهد دراسات الشريعة بجامعة تاكوشيوكو
ومركز دراسات الحضارة الإسلامية بجامعة كويتو
مدير معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
2. محاضرة عن دور جامعة الأزهر في العالم الإسلامي
نائب رئيس جامعة الأزهر محمد عبد الفاضل القوسي
3. مقال : رحلة إلي أوزوبكيستان (1)
المدرس المحاضر بجامعة كانازاوا : هيروفومي موراناكا
4. مدخل الحديث (8) أسلوب تواتر الحديث
طالب دكتوراه بجامعة ملايا أكاديمية الدراسات الإسلامية :
هيروفومي أوكي
5. كلمة النشرة: السيرة النبوية (1)
اخبار المعهد: الدورة الثانية لدراسات التفسير (2)